

バード・コール（4）

事故の原因が判明してから一週間が経過した。

小代里は沈んで晴れない気分のまま、時を過ごしていた。友人もなく、浮いたままの学校生活だったので外から見て変動はない。自らの行いが起こした事故だと気づいた時、何もなく平穏を過ごしていいのかと新たな悩みが生まれ、頭の中で育っていた。

加納は別れ際に来週の日曜日に指定した喫茶店に来てくれと簡単な地図を書いたメモを渡し、要請を出した。以後は連絡がない。

小代里は頭の中が窮屈になった悩みをつまみ出す機会を求めている。加納が指定した喫茶店に向かえば、道具と手段位は得るかも知れない。他に手段がないのでチップの代わりに時間を元手に賭けに出た。学校に行くのと同じ感覚で列車に乗り、麓の駅で降りた。加納から受け取ったメモを見た。喫茶店は駅前の通りにある。登下校の時に通り過ぎる場所だ。地図で示した場所に向かった。

喫茶店は通りの脇にある3階建ての家の1階にある。周辺に人はいない。テラス席はなく、家の前の駐車場には磨ききった車が停まっている。色あせたコーヒーののぼりが脇に立っている。

小代里は失礼だと判断しつつ、駐車場に立ち入り窓に近づいた。カウンター席と座席が見える。不安になりつつも窓を開けた。

ピアノの音がフロア内に充満し、座席には人が座っている。席にはコーヒーとパンが乗っている。

小代里は周囲を見回した。見も知らない他人が入ってもいい場所なのは理解した。今まで一度も一人で喫茶店に来た経験はない。部活の打ち上げを名目にファーストフード店に行った程度だ。何をしていたかわからず、動きを止めている。

カウンター席にいる店員が小代里に気づき、手を止めて近づいた。「席は空いていますから、適当に座って下さい」

「注文は」小代里は店員に尋ねた。

「席についてから行きます。禁煙席は手前とカウンター席です」

小代里は奥側の席を見た。喫煙席とはドアで仕切っている。空いているテーブル席に座り、カバンを足元にあるバケットに入れた。机の上にはメニューが置いてある。開くと手書きを印刷したメニューが入っている。珈琲の種類と味について詳細に書いてある。缶コーヒーの商業で連呼している名前しか知らない。知っているコーヒーの銘柄の値段を見た。中学生が容易く出ない。知らないコーヒーを頼んで大丈夫かと不安になった。

「好きな頼みなよ」聞き覚えのある声があった。小代里は声があった方を向いた。少女が机を介して対面している席に座っている。「コーヒーなんて皆同じ味よ」

小代里は眉をひそめた。皆同じ味なら、わざわざ種類別に書いておく意味はない。

少女は笑みを浮かべ、テーブルの中央に置いてある砂糖を指差した。

小代里は苦笑いをした。確かに大量に砂糖を入れればコーヒーの味は消える。ページをめくった。トーストと共にコーヒーが載っていて、モーニングセットと書いてある。朝食は取ったが、腹には余裕がある。適当に決めてもらった方が楽だ。

店員が近づいてきた。

議員と代表は調査完了の連絡を受け、加納の探偵事務所に足を運んだ。2回目とあって、落ち着いた歩調で事務所に向かい、堂々とインターホンのボタンを推した。

最初に来た時と同じく、女性が応対し中に入った。加納がテーブルに座っている。

「事故の調査が終わりました」

「早かったな、簡単だったか」

議員と代表は空いている席に座った。

「警察が既にまとめていました。完結している事故の再調査ですから、一から調べる必要がなかっただけです」

加納はテーブルに議員側から提出した警察の報告書を置いた。「お借りしていた資料です。大変役に立ちました。調査が早く終わったのも協力があってこそで。ありがとうございます」

代表は警察の報告書を受け取った。「年寄り任せっかちでな、はよ報告書を出してくれんか」

加納は立ち上がって机に向かい、置いてある報告書を手にとってテーブルに置いた。報告書を置いた。報告書はノート2冊分程の厚さがある。席に座った。「報告書です。内容をご確認下さい」

議員と代表は報告書を受け取り、開いて内容を確認した。名前は仮名として伏せてあり、事故の詳細が図入りで書き込んである。事故の原因はカラスが落とす鳥の救助を理由に、被害者が道路に飛び出したために起きたと結論づけている。原因は新居者の側にあったのだ。思惑通りの内容に笑みがこぼれた。

「おかしい点でもありましたか」加納は二人に尋ねた。

代表は首を振った。「予想通りだったのでな、警察は被害者の言い分だけを聞いているだけだ。

我々の意見など耳にせん。我々の仮説が正しかったんだ、嬉しいと呼ばずになんと云おうか」

「同じくだ」議員はうなづいた。「改めて聞くが探偵さん、報告書の内容は事実でいいんだな。まさかウソを書いてないな」

「調査は中立です。私が調べた真実を過不足なく書いてます」

代表は報告書を手に取り、カバンにしまった。

加納は机の上に封筒を置いた。「以来の完了と見ていいですね。では契約書の通り、残りの金額を

お願い致します」

議員は封筒を手を取った。「お前さんは、我々が報告を何に使うか問う気はないのか」
「依頼の時に話した通り、犯罪に関わるのなら受けていません。依頼した内容を何に使うかは勝手です。たとえ犯罪に使ったとしても貴方達の責任であり、私は一切無関係です」

「自己責任という奴か」

加納はうなづいた。責任は仕事として負う義務で、完了した先は相手に明け渡す。責任の範疇外にある行為は負えないだけだ。

「新居者と改めて交渉する必要がある。警察もあてにならんからな。報告書を渡せば交渉のテーブルに付いてくれると信じとる」

「当然だ。村の規則を破り実害を与えたのだ、拒否権などない」議員は代表の言葉に相づちを打った。
「連中はしつこい、報告書を見せても拒否してきたら」

「次の一手は打つとるよ」議員は加納の方を向いた。「かの新居者の身辺調査もしとるんだろ。落ち度のある部分を見つければええ」

加納はため息をついた。「仕事ですか」

議員はうなづいた。「当然だ、奴らを維持にかけてもテーブルにつかせねばならん」

加納は気難しい表情をした。自分達が全体を見ず、良い部分だけを予想し行動するのは危うい。予期せぬ事態にあった場合、向き合わずに都合の良い部分だけを取り出し相手に突き出してくる。出来るのは事実を突き止めるだけで、善悪を突き詰めるのは別の人間の仕事だ。「再契約はしない方針です。加えてトラブルでしたら弁護士に相談するのが良いかと存じます」

「いい加減な奴だな、貧乏なのに依頼を選ぶ身分か」代表はぼやいた。

「仕事にはルールがあります」

代表は眉間にシワを寄せた。

議員は代表の表情を見て、軽く肩をたたいてなだめた。「仕方ない、意固地な奴はてこでも金を積んでも動かんぞ。規則は守らねばいかんからの。お互い様だ」加納に笑みを浮かべた。

「すみません」加納は頭を下げた。「弁護士の紹介なら出来るんですがね、直に関わるのは無理なんですよ」

「規則なら責めはせん。金を払って終わりだな」代表は席を立った。

「はい」

「出るぞ、何かあればまた頼む」代表はドアに向かい、部屋から出ていった。

「世話になった」議員は代表に続いて席を立った。

「ありがとうございました」加納は立ち上がり、頭を下げた。

議員は部屋から出ていった。

ドアが閉まった。

加納はドアを見つめた。村は他人の弱みを突き止め、トラブルを自分達の理論だけで解決する方針だ。自分勝手なルールで自治を決め、他人を潰して統制する。元から色の付いた人間を自分達の色に染め上げるなど、到底不可能だと分かっている。

女性がドアを開けて中に入ってきた。「ずいぶん満足していたわね」

「予想通りだったからね」机の隣に置いてあるロッカーに向かった。「昔話でもして話が長くなるかと予想してたんだけど、簡単に帰ったわね」女性は憂いた表情になった。「言わなくて良かったの、離散の話」

加納はロッカーに上着を入れた。「人は都合のいい出来事しか記憶に残らない。離散に追い込んででも追放した人間など、片隅にも覚えていないさ。連中は些細な出来事の一つとしか認識していないさ」

女性は眉をひそめた。

加納は窓の方を向いた。倉庫で搬送作業をしている光景がある。「大体仕事なんだ、私情は挟めない。出るよ」ロッカーを閉じた。

「いってらっしゃい」女性は加納に声をかけた。

加納はドアを開けて部屋を出た。天は向き合わない者に苦しみを上乘せして罰を与え、向き合う者に罪を与え支払いを促す。適切に支払いを終える為、案内してやるのも責務のうちだ。否、自分の探偵としての使命と言って良い。

小代里は英語の歌詞が乗った音楽と話し声で充満する空間を、落ち着きのない心のフィルタを通して眺めていた。壁にかけてある時計は平等に時間を刻む。何もしないまま、コーヒーカップとトーストの乗った皿を見つめた。両方共中身は消えている。他に注文しないと失礼ではないのか。不安がよぎる。

ドアが開いた。ドアに付いた鈴が乾いた音を立てる。

加納が中に入ってきた。店員が加納の元に向かう。店員が来たと同時にカードを渡した。「コーヒーを一つ頼む」店内を見回した。自分が手を付けた皿を見ている小代里の姿を見つけた。小代里の席に移動した。

小代里は加納の姿を見つけた。

「約束の時間より遅れた。申し訳ない」加納は小代里の向かいあった席に座った。「事故調査は終わった。協力感謝する」

小代里はうなづいた。「私自身が事故を起こした原因でしたから、協力できただけでも気が晴れます」たどたどしく声に出した。

「今でも辛いと」

「いえ」小代里は首を振った。「助けた鳥は大丈夫だったんですか」

「ペットショップに運んだ鳥なんだがね」加納は一瞬、眉をひそめた。「手を離れて空を飛び去ってしまったと連絡が入ったんだ」

小代里はわずかにうつむいた。加納の表情と回りくどい言葉から回復せず死んだのは分かった。気が晴れたとウソを言っているのでお互い様だ。責める気はない。

加納は小代里から目をそらし、周囲を見回した。ウソをつくのは後ろめたく、反応を見て追い打ちをかけるのではと不安だった。反応を見たくなかった。

小代里は隣に目をやった。隣の席には少女が座っている。

少女は小代里の方を向いた。小代里と目が合った。

小代里は声を漏らした。

「わからなくなったら人に聞きなさい。自分で縮こまっても何も解決しないわよ」少女は小代里に言葉を発した。

小代里は顔をしかめた。分かっているが探偵に話をして大丈夫か。

「知っている人に話すしかないでしょ、他に誰に話せるの」

小代里は加納に目をやった。少女の言葉通りだ。自分が事故の原因だと親に話しても、聞き入れないか突き放すしか返さない。村人に話せば徹底して責め立て追い出しにかかる。学校にいる人にも、精神科の医者にも話しても適当に受け流すのは目に見えている。人間は他人の重大な出来事は自らに降りかかる厄災とみなして受け入れず、適当にごまかして逃げる。

「前にいくらでも経験がある、向き合うしかないって言うてましたよね。私は何をすればいいんですか」

「自分に悪くないと説得し、納得してもらおうしかない。と言っても、質問している以上は悪くないと割り切っていないよね。自分が悪いと認識する理由は何だ」

「私のせいで事故を起こしました。真、いえ岩田さんは」

「事故を始め、出来事は複数の要因が重なって発生する結果だ」

ウェーターがコーヒーを持って加納の席に来た。「ご注文のコーヒーです」コーヒーを置いた。小代里の元においてある皿を片付け、去っていった。

小代里は伝票がないのに不自然さを覚えた。

「今コーヒーが来たのは、注文するという要因があったからだ。では何故、コーヒーを頼んだんだ」加納は小代里に尋ねた。

「喫茶店に来たからですか。頼まないで失礼ですよ」

加納はうなづき、テーブルの上に置いてあるシュガーポッドを開けた。「失礼だから頼んだ。となれば頼んだのは結果で、失礼なのは要因だ。結果が原因となって次の結果に結びつく」砂糖をコーヒーに入れ、カップに付いているスプーンでかき回した。

小代里は眉をひそめた。「何の関係があるのですか」

「頼んだ先は」

「コーヒーが来ます」

「来ないかも知れない」

「ありえませんよ、失礼です」

「なら、鳥を助けた結果の先は。バイクが来て事故が起きると認識していたか」加納はカップを手に取り、コーヒーを飲んだ。

小代里は引き下がった。

「車は来ない。だからバイクが来るなんてありえない。コーヒーの注文を無視する訳がない。同じだ。でも可能性としてはあり得る。人間は予知能力者ではない。あらゆる出来事を一瞬で想定できる優秀な頭もない。だから当時、ありえないと判断して行動した行為を責めるのは、誰にもできない。自分自身でもだ」

小代里は黙った。

「予測出来ず発生した結果で、自分を責めても何もならん。向き合う作業の半分は精算できる」

「残り半分は、何ですか」

加納はカバンからハンディプリンタとスマートフォンを取り出した。「君は調査に協力してくれた。報酬を渡すのが義務だ。だが子供の君に現金を渡せば、犯罪者と間違えう奴が出てくる」スマートフォンを操作した。ハンディプリンタが起動し、印刷をした。

「安心してくれ、事故の相手は意識を回復したと連絡があった」

加納は印刷した紙を差し出した。「相手が入院している病院への地図と連絡先だ。知り合いだと言って話をすればいい。通してくれるかは別問題だが、知り合いなら大丈夫だと判断している。向き合うなら素直に謝れ。誤った結果の次に何が待っているか分からんが、気が晴れるのは確かだ。君がコーヒーを頼めば来ると言っていたのと同じ確率でな」

小代里は紙を受け取った。

加納は残ったコーヒーを飲み干した。「俺からは以上だ。調査に関する内容は終わりだ、直に訪ねない限り関わりは消える」伝票に手を伸ばした。

小代里は伝票を手元に寄せた。「私の伝票です。私が払います」

加納は苦笑いをした。「俺が呼び出したんだ、子供にはきつく」

「子供扱いしないで下さい」

加納は手を引いた。「分かった。では失礼する」カバンにスマートフォンとハンディプリンタをしまい、席を立った。

「貴方の伝票は」

加納は財布を取り出し、クレジットカードを出した。「探偵は先払いが基本だ」店から出ていった。

小代里は隣りに座っている少女に目を向けた。

少女は小代里を見てうなづいた。同じ判断だ。

小代里はレジに向かい精算し、外に出た。

時間は朝から正午へ向かっていて、夏の日差しが照りつけている。

小代里は加納から受け取ったメモを見た。病院の住所と地図、部屋番号が書き込んである。

少女は小代里の隣でメモを見て笑みを浮かべた。「行きましょ」

小代里はうなづき、病院に向かって歩き出した。

病院は街の一区画を占める程の容積を占め、10階建てになっている。一見してマンションと錯覚する程だ。

小代里は入り口の自動ドアの前に来た。ガラスを通して真新しい待合室が見える。自分が入っているのかと不安を覚えた。隣を向いた。少女が立っている。

「大丈夫かな」小代里は少女に尋ねた。

少女は何も答えない。

「大丈夫って聞いてるんだけど」小代里は改めて少女に尋ねた。

少女は何も聞こえず、病院を見つめている。

小代里はうなづいた。結論は少女と同じだと気づいた。病院の自動ドアの前に足を踏み込んだ。自動ドアが開き、中に入った。